

ラテンアメリカ都市物語

＝第19回＝

マナグア その文化と歴史

鈴木 康久

マナグア市の誕生

中米にあるニカラグアは、スペインからの独立後の混乱期を乗り越えて1852年にマナグア市を首都に指定した。実は、その北西に自由党の勢力が強かったレオン市が、南東に保守党の勢力が強かったグラナダ市があり、争っていた当時の二大政党の妥協として、両者の中間地点のマナグア市が首都に選ばれた経緯がある。マナグア市は、マナグア湖という湖の湖畔に生息していた Cholteca 族（ホンジュラスにも広がっていた先住民）の居住地で、「マナグア」とは文字通り湖の側の地という意味だそうである。食料生産や飲料水に恵まれた平坦な土地ということで首都に指定され順調に人口が拡大していった。しかし、1931年にマグニチュード6の、1972年にマグニチュード6.2の直下型地震に見舞われ、首都としての主要な建造物やコロニアル調の住宅街は崩壊した。

地震からすでに50年も経ているが、いまだに高層ビルや商店街は再建されず、首都としての景観はなく、地震の傷跡はあちこちに見られ、ラテンアメリカ特有のゴシック調のカテドラル（大聖堂）は現在も放置されたままになっている。周辺にあった商店街やダウンタウンの町並みは消滅したまま、今に至っ

ている。20数年前、最初にニカラグアに来たとき、空港から平屋造りの質素な長屋が続いていたので「いつマナグアに着くのか」と運転手に聞いたら、ここがマナグアですと言われ、一軒家の「ホテル」に連れて行かれて驚いたのを覚えている。当時、外務省も倒壊を免れた平屋の一軒家を改造してできたところにあった。さすがに今ではカテドラルは別の場所に再建され、主要な官庁も少しはましなところに引っ越したが、ラテンアメリカ最貧国の一つとしての再建への道のりはまだまだ遠い。

ニカラグアと日本との関係

中米は米国との経済的な結びつきが深く、朝鮮戦争が始まると、米国において労働集約的な綿花の生産が落ち、それを補う形で、米国企業が労働者の豊富なニカラグアやエルサルバドルに投資する形で綿花栽培が開始され、当時「白い黄金（Oro Blanco）」と称されて、重要な輸出品となっていた。そのため1960年代から70年代にかけて、丸紅（当時）、三菱商事、三井物産、ニチメン（当時）、トーマン（当時）といった日本の企業が進出し、ニカラグアと綿花の取引をするようになった。それ以外で



1972年の直下型大地震前後のマナグア市（国立歴史博物館提供）



倒壊をこううじて免れたカテドラルと新カテドラル
（以下の写真はすべて筆者撮影）

も中米のマーケットを視野に入れて信越化学がレジ
ン生産の工場を、伊藤忠商事が製鉄会社を、三井物
産が化学工場をそれぞれニカラグアに建設した。実
は当時のニカラグアは、綿花や牛肉の輸出で儲けて、
中米でも最も豊かな国の一つだったのである。日本
との輸送船の航路が開設されたのもこのころであり、
トヨタなどの日本車やパナソニックなどの家電がニ
カラグアでも知られるようになったのもこの頃であ
る。それが上記の地震と長年の綿花栽培で土地が瘦
せてしまったことで、綿花産業が立ちゆかなくなり、
綿花栽培に携わっていた大勢の労働者が一度に失業
者となったことが背景となって、サンディニスタに
よる革命戦争が開始され、その後、エルサルバドル、
ホンジュラスなども巻き込んで、いわゆる中米戦争
が勃発したため、残念ながら日系企業はすべて撤退
していった。さらに言えば、その同じ頃に沖縄返還
交渉や日米繊維交渉が行われていて、日本が繊維製
品の対米輸出を減らすことになったこともニカラグ
アからの企業の撤退の背景にあげられる。現在は内
戦後進出してきた車両用のハーネスを生産する矢崎
総業だけが主たる日系の製造業である。ちなみに、
中米の和平が達成した後、多くの韓国企業の進出が
始まり、現在では30数社の韓国企業がフリーゾーン
で主に対米輸出用の繊維製品を作る会社とその関連
会社を設立してニカラグア経済を支えるビジネスを
展開している状況である。韓国人のガッツに敬服を
覚えると同時に、過去の経緯を知る日本人としては
少し寂しい気がするものである。

ウエンベス市場とショッピングモール

ダウンタウンの商店街がないために、市内には食
料、洋服、雑貨、定食屋などありとあらゆるものを



ウエンベス市場ではイグアナも売られている

扱う店が集積している大規模な集積市場がいくつか
ある。市場といっても入り口や出口がいろいろあっ
て、中もいくつもの通路に分岐されているので、一
人で出かけると今自分がどこにいるか見失ってしま
う危険な臭いさえするところではある。そのうちの
一つがウエンベス市場であるが、確かに行ってみる
と野菜などは新鮮な感じがするし、たいていは必要
な量だけ買える量り売りなので、庶民にとっては便
利で、昔の日本の市場を思い出させる風情である。
20数年前は鶏肉の味のするイグアナを店頭に並べ
ていた店もたくさんあったが（筆者は二度目のニカラ
グア在勤）、いまでは1件のみとなっていた。みんな
食べてしまったのかしらん。

数年前に、マナグア市の高台の地にサント・ドミ
ンゴという近代的なショッピングモールが完成した。
マナグア市では三つ目の規模は最大クラスのモール
で、エルサルバドルの投資グループが建てたといわ
れている。近くにバス停もなく、一般庶民が行くと
ころではないものの、モールの中の店は、中南米の
どこでも見られるようなサングラス、靴、ファッショ
ン、雑貨、携帯等の店およびフードコーナーである。
映画のフロアはかなり広く、10室プラス1（大きな
VIPルーム）のシアタールームがあり、ポップコー
ンとペプシを注文して映画を見る風景は、まったく
米国のどこかの都市と変わらない風情である。VIP
ルームは通常価格の倍の900円もするが、ファース
トクラスのシートに体を横に倒して、飲み食いしな
がら映画を見るのは、かなりVIPな気分になれるの
で、筆者もたびたびお世話になった。

日本庭園

マナグア市には2005年に日本とニカラグアの協力



日本庭園入り口

でできた大きな日本庭園がある。当時 JICA の協力隊員の中に、建設会社の元職員が含まれていたおかげで、かなり立派な庭園に仕上がっている。完成除幕式には常陸宮殿下も来訪された。現在もマナグア市が所有、管理しており、中には鳥居、日本式の庭園とアーチ橋に加えて、大ホールと小さなホールが併設されている。ホテルの数も少なく、イベント会場もほとんどないマナグア市では、貴重な施設となっており、前者は武道などの稽古のみならず、各種セミナー、スポーツイベント等に頻繁に使われ、後者も展示会や結婚式の披露宴などにも使われているようである。もちろん日本語弁論大会や日本の文化紹介イベントもここで実施している。

友好議連と日本との友好の日

ニカラグア議会には超党派で日本ニカラグア友好議員連盟があり、その議員たちのおかげで 2017 年に両国の外交関係が開設された 2 月 20 日を両国の友好の日とすることが議会の決議で決められた。毎年その日には、本使も国会に呼ばれて両国の友好親善を確認し合うスピーチを行っている。スピーチの後に、議場内で民族舞踊が披露されるのが恒例となっている。合わせて日本から送られてきた広報ビデオを上映して、日本の紹介に努めている。自然に囲まれたニカラグアは環境保護に強い関心があるので、携帯の廃材で作られるオリンピックメダルの紹介ビデオは、ニカラグア側の評判が良かった。

サント・ドミンゴ・デ・グスマン祭り

8 月 1 日はマナグア市の守護神に関するお祭り日である。1855 年に、ある木こりの先住民がマナグア市の郊外の木の中にキリスト像 (?) のイメージが浮かび上がるのを見たと言うことで、その地に小さな教会が建てられ、奴隷や先住民の守護神であった聖サント・ドミンゴ・デ・グスマン司教がまつられることとなった。そのため大勢のマナグア市民が神輿を担いで練りあるく 1 日の祭りの日には先住民の代表であるカシケが先頭を歩くことになっている。そして近年ではそのお祭り日には、宗教行事と平行して、名馬を競うマナグア市内での乗馬の行進と「carnaval alegria por la vida」と称されるカーニバルの行進が行われる。昔は地方からカーニバルを見にやって来た大勢の男たちが、特に宿を取ることもなく、夜通し飲み歩いて道ばたで寝ていたもので、筆者自身も



サント・ドミンゴ・デ・グスマン祭りと市内での乗馬の行進

一度目の在勤時に、自宅前で寝ている酔いどれ親父を目撃したが、最近ではさすがに道ばたで夜を過ごす強者の数は減っている。



ガージョピントとビゴロン

ガージョピントとビゴロン

メキシコではトルティージャといわれるようなトウモロコシで作った食べ物が主流であるが、ニカラグアは雨が多いせいか、陸稲の米作りが盛んで、それに小豆に似た赤い豆と一緒に煮込んで作るガージョピントが主食である。特に塩味などの味付けはないが、黄身が半生の目玉焼きをのせて黄身にナイフで切れ目を入れてご飯と混ぜて食べるとかなり美味である。あと豚の皮を油で揚げてキャベツの千切りと一緒に食べるビゴロンも庶民食として有名である。ガージョピントが朝食ならば、ビゴロンは昼食

に食べる。昼食と言えば、小生は鶏肉の入った茹でたトウモロコシ饅頭の「タマーレス」などのような物を期待していたが、実際にはいろいろなイベントでビゴロンが提供された。参加費の高いゴルフのコンペティションでさえもビゴロンが出てきたのには筆者も驚いた。ビゴロンは脂身が多く、健康にはかなり悪そうではあるが、カリカリしてうまいことは確かである。誰が考え出したのか、少し塩漬けたキャベツの千切りとの食べ合わせは絶妙である。



アジェンデ港

クリスマスとサルバドール・アジェンデ港

マナグア市を南北に通る中心の道路は「ボリバル」と称されている。その南の端はチャベス広場となり北の端がマナグア湖に行き着く。マナグア湖は

琵琶湖の1.6倍程の大きな湖であり、ボリバル通りとマナグア湖の接点に、いまは廃墟となった旧カテドラルが建っている。そのすぐ側にマナグア湖を回る遊覧船を走らせるためのサルバドール・アジェンデ港が数年前に建設された。平行してその港の周辺にはレストラン街とイベント会場を設置し、殺風景だったマナグア湖湖畔が、華やかな憩いの場に変身した。クリスマスシーズンになるとそのボリバル通りからアジェンデ港にかけて煌びやかなイルミネーションで飾られ、道路の両脇には電飾で飾られた「キリスト像」や「馬小屋」の飾り付け、そして多くの出店が並び、夜半に繰り出した家族連れを楽しませてくれる。お金のない庶民にとって家族での散歩が楽しめる貴重な時間と空間である。またクリスマスシーズンや年末年始の夜中には、どこの家でも花火遊びをする。多くは中国製で、バンバンバンという音だけのかんしゃく玉がほとんどであるが、小さな打ち上げ花火等も上げられる。政府も大きなイベントの後には集まった市民のために花火を打ち上げる。日本と違い、低空で爆発するので迫力は満点である。人々は周辺に火花が落ちていくのを見て歓声を上げており、ハラハラしたのは気の小さい筆者だけだったかもしれない。

(すずき やすひさ 在ニカラグア日本国大使)

ラテンアメリカ参考図書案内



『年表 移住 150 年史 —邦人・日系人・メディアの足跡』

岡野 護編著 (一社) 海外日系新聞放送協会制作 風響社発行
2020 年 9 月 392 頁 5,000 円+税 ISBN978-4-89489-280-4

1977 年に (財) 海外日系人協会に入り 2016 年に退職するまで在職、半年刊誌『海外日系人』の編集・制作に関わり、現在も (一社) 海外日系新聞放送協会専務理事、(公財) 海外日系人協会の常務理事を務めている著者が取り纏めた「地域別移住略史 付・写真で見る移民の歩み」と 1841 (天保 12) 年から 2019 (平成 31 / 令和元) 年に至る「年表」、その出典・引用・参考文献、索引から成る詳細な資料の集成。

移住略史は米国、カナダ、オーストラリア、フィリピンその他中南米はブラジル、ペルー、アルゼンチン、パラグアイ、ボリビア、メキシコ、ドミニカ共和国、コロンビア、ベネズエラについて、それぞれ約 2 頁で解説している。移住は各年毎に各国での移住に関わる動き、行事が詳細に取り上げられ、要所で細く説明が付されている。海外日系人との連携に 40 年以上関わり、丹念に収集した移住 150 年間の資料を克明に整理した、日本人海外移住史研究にとっても極めて有用な労作。

〔桜井 敏浩〕